

2016年7月1日

数脈（さくみやく）について

脈診のなかで最もわかりやすいのは、現代医学では心拍数とよばれる（数・遅）の脈診です。1分間の心拍数（脈拍）で数脈・平脈・遅脈が決まるので、初心者でも脈診ができます。

現代医学では1分間に60～90、100前後までを普通（平）とみなしているようです。長野式鍼灸では60未満を遅脈、60～80を平脈、80を超えると数脈と区分しています。

数脈の中でも脈拍が120～150以上を疾脈（しつみやく）といい、この脈が2～3日続く場合は深刻な状態であり、心臓を詳しく検査した方が良いといわれています。

東洋医学は、検査器具を使用しないので、四診（望・聞・問・切）を基本にして総合的に診断します。望（視覚の情報）・聞（聴覚・臭覚の情報）・問（既往歴や日常の様々な情報）・切（脈や腹の触覚による情報）です。脈診は切診に入ります。

数脈について、鍼灸関係の本を何冊か調べましたが、やはり、長野潔先生の解説が詳細で最もわかりやすいので、それを参考にしていきたいと思います。

まず、数脈の病態として考えられるのは、疼痛、炎症、腫脹、進行性病変、熱、交感神経緊張、血液異常、精神の興奮、甲状腺機能亢進、一過性心房細動、心筋梗塞、心筋炎、貧血、心不全などです。

そして、数脈よりもさらに早い疾脈の病態としては、神経性心悸亢進、心室性頻脈、心房性頻脈などが考えられます。

今日の社会では多くの人々がストレスを感じ、いつ、誰もが、うつ病などの精神疾患になってもおかしくない社会状況になっています。

特に、若い世代では、今までにない新型のうつ病を患う人が増えています。

最近、労働安全衛生法が改正されて、50人以上の従業員を抱える会社では、通常の健康診断以外に、年に一度のメンタルヘルスチェックが義務化されました。それは企業にとって、精神疾患というものが、すでに大きな影響を及ぼし始めていることの証明でもあります。

『鍼灸臨床新治療法の探求』長野潔著の中で次のような指摘があります。

「ストレス過剰の今日的状況では、交感神経過緊張の患者が多く、数を呈し（中略）心理的、身体的疲労が扁桃の病変を引き起こし、（中略）下垂体前葉の興奮から間脳視床下部への影響、交感神経の過緊張と迷走神経機能が低下（中略）扁桃病変を胸鎖乳突筋や頸静脈窩の圧痛で感知することができる。（中略）要約すれば、体質的なもの、内分泌・自律神経系失調のもの、器質的な疾患のもの、またこれらが互いに複合したもの、と言える。」

「数の特に著しい頻拍性(心室性、心房性)頻拍は、冠状動脈の硬化と共に交感神経の過緊張を現わす。(後頸部のうっ血著明)」

「数（脈）を平脈に調節する点(交感神経過緊張抑制点)は、主に次のような経穴を複合的にまた、選択的に用いる。」

巨闕（心経募穴）、中脘（胃経募穴）、気海（任脈）、関元（小腸経募穴）、中極（膀胱経募穴）、右天枢（胃経）、右滑肉門、気穴（腎経）、気衝（胃経）、大巨（胃経）、巨膠（胃経）、陽輔（胆経火穴）、足臨泣（胆経木穴）、外関（三焦経絡穴）、足指間穴、壺門（督脈）、身柱（督脈）

先日ある患者さん（80歳）を診断したところ、年齢にしては脈が早く（90前後）、後頸部のうっ血が著明でありました。上記経穴のうち中極や右天枢の反応点を中心に長野式治療を試みました。

脈拍を比較すると、施術前：86、施術後：73となり、一応の成果を得たことになりました。患者さんも「非常に楽になった」との感想をもらしてくれました。

鍼灸治療が交感神経の過緊張を緩める有効な手段であるといえます。